打つ人も打たれる人も もろともに

株式会社ナリス化粧品常務取締役
東郷　敏

只今ご紹介をいただきました、開基家の代理として参らせていただきました東郷と申します。今日、善光寺の十五周年という、誠にめでたい日でございますが、この十五周年の今日があるのは、この十五年前の第一日、第一歩があったと思います。このめでたい時に、ぜひそのころの方丈の姿、お気持を伝えさせていただきたいと思います。（方丈、よろしいですか？）

今も伊藤先生からもございましたが、私が方丈と巡り会いさせていただきましたのは、総持寺の夏季摂心におきまして、たしか昭和三十七年であったと思います。その時に私、はじめて、先代社長開基に連れられまして、給料のために坐禅にいってまいりました。その時に、私は坐れないものですからとにかく姿勢が悪かったのでしょう。もうほんとうに感情をこめてたたきあげられる方がありましたので、私も恨みを持って、坐禅よりもその当人を確認させていただいたのが、只今の方丈であるわけです。それで、その恨みは消えるものではございませんで、いよいよ打ち上げの日に、

私は社長とともに、帰り仕度をさせていただいておりました。そこへ飛び込んで来られたのが只今の方丈でございました。私は申し上げたんです。

「先生、悟りというのは、何んですか」と。そしたら先生は、

「ワッハッハ。悟りがわかれば、私はこんな所におりませんよ」

アレッと思いました。この人はお坊さんであったんだけど、いっしょだったんだなーと、何んともいえない親しみと、何んともいえない安堵を持ちまして、ひよっとしてこの先生と将来連れ立って、ついて行けば将来いいことがあるんではないかと、そのような気がしたもんですから、社長に、実はこの方がいちばん恨みをもってたたいておった……あのたたきには何か理由があるのではないかと思って、会社にお呼びして私共の坐禅の指導をしていただきたいものだと申し上げましたら、それはいいことだ、ぜひ呼ぼう、ということで帰りました。三日目でございました。総持寺に電話させていただきました。

「こういうことでございますので、先生、社員教育においでいただけませんか」といいましたら、

「いかせていただきます。いつですか」とおっしゃるから、

「あしたです」といったら、

「いきます」

といわれておいでいただいて、その時二日三晩会社を休んで全社員が坐禅をご指導いただいたわけでございます。私は、たたかれたことと、何か、反抗的にもお返ししたい気持がございましたので、幹部社員で十五人ぐらいでございましたか、打ち合せをして、先生をこらしめるにはこれしかないというんで、とにかく、全員が最初から最後まで、警策を待つ合掌をしつづけていこう、そうすればたたかなければいかんのだから、たたき続ける先生はきっとこたえるにちがいないというんで、さあ、一時間におそらく三百ぐらいの警策をうけ続けまして、私達の衣は破けますし、血はふきで

ますし、そうして先生の手はだらんとしていますし、手はまめでまっか、血だらけのその中で、社長が申しました。「おまえらのは坐禅でない。あれは喧嘩だて、あんなことしてたらいかん…」と、こういうようなわけで、その中ではじめて男が男に惚れるといいましょうか、とにかく抱きついて、共に生きたい、その気持が培かわれまして、先生はそれからまもなく総持寺での修行を終えられ永平寺に行かれ、そしてこんどは、

「社長、インドとタイにいきたいんだが」

ということで、お釈迦さんの生誕の地で修行したいんだと、それならばというんで、社員こぞって協力をさせていただいて、インドとタイにお行きになり帰られてまだ報告の口がかわかぬあいだに、今度はアメリカに行って坐禅の布教をしたいとこうおっしゃって、またアメリカの方にお行きになり、とにかく先生と付き合ってからは私達は追いまくられ、先生がこられると、ぞっとすることばかりが続いても、なお先代の社長という方が、この方に、この方に、ということでやっていきますと、その心が会社の結束、ナリスの利益に還元され、ナリスは先生を知ることによってどんどん利益も上げさせていただきました。まさしく先生はナリスの利益に貢献していただいたわけでございます。私達はあきんどでございますから、きれいな心は持ち合わせておりません。でも、もうけたお金を使ってくださるのが先生だったわけでございます。

そしてちょうど十五年前でございます。今日の十五年は先生の結婚十五年でもあるわけです。そして七月のあるとき、私が東京に出張してまいりましたとき、先生が東京の支店においでになりまして、「先生、また何んですか」といったら、「実は東郷さん、これなんだけど」「これって、何んですか」「ちょっと見てくれ」と見させてもらったのが、あばら屋が一軒建っていたものを見せていただきました。「実はここにどうしても寺を興こしたいんだ。私は急いでいるんです。人の心を救うことに、私、やらせてもらわなければいかんのだが、お金がないんじゃ」と。「ホラまた来た」と思って、「そら先生、簡単にお金は集まるものじゃありません。会社もそういつでもお金があるものではありませんが、先生がおっしゃるのだから社長に話をしてみますが、いくらですか」といったら、「七百二十万円かかります」と、今から十五年前でございますからちょうど一億円くらいのお金に感じます。

「それじゃ先生、ほんとうに買うんですか」「買いたい」と。「きまった会社のお金よりも一人一人の小さなお金がほしいんです」と。貰うについても条件をつけられるわけです。ほんで、「東郷さん、あんたは北海道から沖縄まで歩いているから、その間に、できたら一人一人話をして、お金を集めてくれないか」といわれるから、訳も分からぬまま私は約束をして「じゃ先生、集めましょう。何年ぐらいですか」といったら、「三ヶ月です」とおっしゃるんです。「そりゃ、先生三ヶ月じゃ集まらん」といったら、「あの土地も家も、三ヶ月時間をおいてしまったらなくなります。だれかにわたってしまいます」と。だから、わずか九十日だと、おっしゃる。私も今まで物を売ったことはございますが、けれど思想とお名前で金を集めたことはなかったのです。それで社長に申し上げまして、そのことをさせていただき、約千名ぐらいだったと思います。

その頃です、その話を終わると同時に、

「東郷さん、実は今日、私は見合いがありまして」と。

「見合いって何んですか」

といったら、実は、

「もう独身協会会長をやめて、私も結婚する気になった。寺をすすめるにはやっぱり女房がなくてはいかん」

「そりゃね、先生、こまります。金はほしい、結婚はしたいでは困るが、見合はいつ、どこでですか」といったら、

「不忍の池の、あのホテルのあすこで待っています。この話が終われば、私いくんです」「そりゃ先生、こまります。その女の人をことわって下さい。ことわれなければ、先生、私が行ってことわってあげましょう」と、私は先生といっしょに、その見合いをぶっこわしにいったわけです。そして「先生、永平寺の三番目にえらい単頭老師のお嬢さんで、倫子さんという方がナリスの社員で社長の秘書でいらっしゃるんです。あの方をもらって下さい。好き嫌いの問題でありません。お金の問題です。あの方さえもらってくだされば、あの方の名前を使って、私はお金を集められます」といったんです。さいわい先生は、倫子夫人に一目ぼれでございました。そして、ついに十一月に千名の方から、約壱千万円のお金が集まりまして、この第一日目があったわけです。それで、先生の心意気というか、情熱といおうか、私はこの先生のすべてに傾倒して、ナリスの先代もほんとうにこの方にほれて、そして今日があるように思います。それからお集まりの皆様方の、お力、お心で、こんな、りっぱなお寺が興隆して、これから人心救済の基盤が樹って、まったく大変な勢いで発展されることだと思っております。大変僭越なことを申し上げましたが、方丈、おゆるしください。倫子夫人のために、このお寺が出来たと思っております。ありがとうございました。

最後に、ナリス現社長は、先代社長に負けず劣らず善光寺に尽し、善光寺の繁栄を祈念し、物心両面の御協力をしておりますことを申し添えて、私の祝辞といたします。